

本土空襲

火の中を逃げまどった

米軍による空襲は国内の各地を襲い
人々は家を焼かれ、命をうばわれた。



東京大空襲

3月10日、東京大空襲

東京が火の海になった。

〔東京大空襲〕とうきょうたいくうしゅう

昭和20年3月10日、東京に米軍のB29爆撃機の大群が飛来し、約2千トンの爆弾を投下。町は火の海となり、約10万人が命をおとしました。米軍による空襲はこれまでは主に軍事基地や軍需工場が狙われていましたが、これ以降8月の終戦の日まで、日本中の都市も無差別に爆弾が落とされました。

一九四五年三月十日

未明の東京の

この火火の下で

十万人の命が

消えた

二度と

この空襲を見たら

東京大空襲をこの目で

―二度と戦争のない世の中に―

神崎町 高橋 節子

忘れもしないあの昭和二十年三月九日、東京大空襲の夜の出来事を……。

当時九歳（国民学校二年生）の私は、東京大空襲の中心地であった下町本所区の住人だった。あと一週間で二年生を修了し、三年生に進級するという喜びと、春休みには家族そろって青森の田舎に行けるうれしさで、その夜も、まくら元にランドセルと洋服をそろえ床についた。

夜九時ごろだったろうか、ラジオから「空襲警報発令。空襲警報発令。東京上空に敵機襲来。」の放送に、慌ただしく母に起こされ、洋服を着られるだけ着せられ、家の前の防空壕に避難した。しかし、その夜の空襲はいつもの空襲とは違っていた。夜十一時から未明にかけて、B29爆撃機の大編隊が東京上空に襲来、江東方面一帯に焼夷弾の雨を降らせたのである。私たちの住んでいた本所、深川は瞬く間に火の海と化した。

このまま防空壕に入っていたら全員焼け死んでしまうとのこととで、避難場所を別に移すことになった。ところが、火は風を呼ぶというが、その夜は火勢で突風が生じ、私のような子供は立つて歩くことができないほどの風の強さである。猛火は地をはい、火の粉が吹雪のように舞う中を、幼子を連れた家族が逃げ場を求めて走り回る姿は、今思い出してもぞつとする。

持ち物には次々と火がつき、着ているものにも火がつく。そのままにしておいたら焼け死んでしまう。泣き叫ぶ子、火だるまの人、倒れる人。そのような中をみんな生き延びようと必死に逃げ惑う。私たち家族も三時間近くは逃げ回ったであろうか。やつと深川方面の焼け跡に逃げ込み、父がトタン板で一晩中火の粉を防いでくれたお陰で命が助かった。しかし、父の目は火の勢いと熱風のため、何も見えなくなっていた。また、私の衣服に火がついた時、逃げるのに夢中で肩まで焼けていたのに気づかず、あと数十分気づかなかつたら焼け死ぬところだった、と言われた時は思わず手を合わせた。

長い長い地獄のような一夜がやつと明けた。目の前は見渡す限り焼け野原と化し、あたりは焼け焦げたにおい、燃え残った残骸、黒焦げの焼死体が数えきれないほど散乱していた。

助かった人々の顔も、昨夜の猛火の中を逃げ回ったためか、どの顔も真つ黒であった。洋服もぼろぼろ、中には焼けただれで裸同然でふらふら歩いていた人もいた。また、行方不明の子供や親の名前を呼びながら、黒焦げの焼死体を一体一体確かめている人の姿も多く見られた。助かった人々の中には、川に飛び込み筏の上でひと晩中、川の水をかぶっていた人、防火用水桶の中に入り水をかぶっていたが、水が熱湯になり全身やけどをした人もいた。川に飛び込んで溺死した人も多かった。防空壕に入った人たちは、蒸し焼きの状態で死んだ人も多かった。

私の通っていた国民学校では、多くの友達が集団疎開をして

いた。その中の親友の一人は、家族全員死亡で、子供一人残さず孤児になってしまった。

私たち家族は、この焼け野原の東京にはいられないので、父の実家の神崎へ身を寄せることにした。しかし都電は焼けただれ動かない。総武線も電車が焼け焦げひっくり返ったままである。そのうえ道路ぞいには、折り重なって真つ黒に炭化した死体のごろごろがっている。その中を歩いて市川から電車に乗り成田に着いたのは夜中だった。

一夜にして十万人の生命を奪い、百万人の罹災者を出した東京大空襲……。多くの犠牲者の冥福を祈るとともに、二度とこのような悲しい出来事が起こらないように祈らずにはいられない。

このような悲惨な体験は人に知らせるものではないと思つたが、二度とあの恐ろしい戦争をしないためには、この悲惨な体験を次の世代に語り継ぐことも、私たち世代の大切な役目ではなからうかと考えた。

一夜で十万人もの生命を奪うものは戦争しかない。この悲しみを二度と繰り返したくはない。

今の平和な生活からは想像できない出来事だが、この平和を守り続けるためにも、二度と戦争はしてはならないと思う。

声

背の赤ん坊に 焼夷弾が直撃

無職 菊地 章

(埼玉県鴻巣市 70歳)

戦争中、我が家は東京の小石川区(現在の文京区)にあった。昭和20年3月9日の夜中、空襲警報で飛び起き、表に出てみると今まで見たことのない超低空のB29が西から東の方に飛んでいくのが見えた。

その後、次から次へとB29が通過するのを見て、これはただごとではないと、自宅の床下に掘った防空壕に家族5人で飛び込んだ。様子を覗いていたら、爆撃の目標は本所、深川方面らしい。東の空が真っ赤になり、爆撃は明け方まで続いた。朝方、表へ出てみると、目を真っ赤にした人々

が荷物をリヤカーや荷車に載せ、避難して行くところだった。この空襲で10万人近くが亡くなった。

2回目の大空襲が4月半ばで、我が家付近も目標になり、焼夷弾の雨の中を逃げ回り、広い空き地に避難し、周りをみると四方八方火の海で、トタン板が飛びかっていた。この空襲で、隣の家の赤ちゃんを母親に背負われ防空壕に入っているところを焼夷弾の直撃を背中を受け、赤ちゃんは亡くなった。母親は夢遊病者のように赤ちゃんを背負い続けていた。

3回目の大空襲は5月下旬で、東京の街は半ばが焼けてしまった。その後、攻撃目標は地方都市に移り、東京の丸堀は免れた。戦争は非戦闘員をも巻き込むということを経済家は忘れないで欲しい。

橋上のお経が 空まで響いた

主婦 尾間 久子
(横浜市 66歳)

連日の空襲の不安が私の体をいつも覆っていました。その頃から微熱が続くようになり、学校も休みがちになっていました。

とうとうその日はやってきたのです。既に火が地面をはい、火の風が吹くなか妹を背負った母と私は逃げ惑い、一晩中走り続け、たどり着いたのは隅田川にかかる飯橋でした。遠くで私の名を叫びながら倒れる母が見えましたが、どうすることも出来ません。私の足は火の風に押され前に流れていってしまいます。転がるようにして走る私をよっこと押さえて止めてくれた人がいました。気がつけばそこでは大勢の人がお経を

唱えていました。小さな声が大会唱となり空まで響き渡っていました。

その時、2人のシルエツトが薄明かりの中に浮かび上がりました。1人は私を受けとめてくれた紳士でした。2人は父子で、少年は今日が出征の日のようでした。「お母さんはもうだめだろう」。そんな会話が聞こえました。その悲しい日に彼は出征していったのです。少年は一礼すると、きびすを返して、私が今来た方向へと足早に歩き始めました。父親はその後ろ姿を身動きもせずじっと見送っていました。

東京大空襲は悲しい別れの日でもありました。

手を合わせて

死人の山越え

無職 小沢 幸子

(千葉県船橋市 71歳)

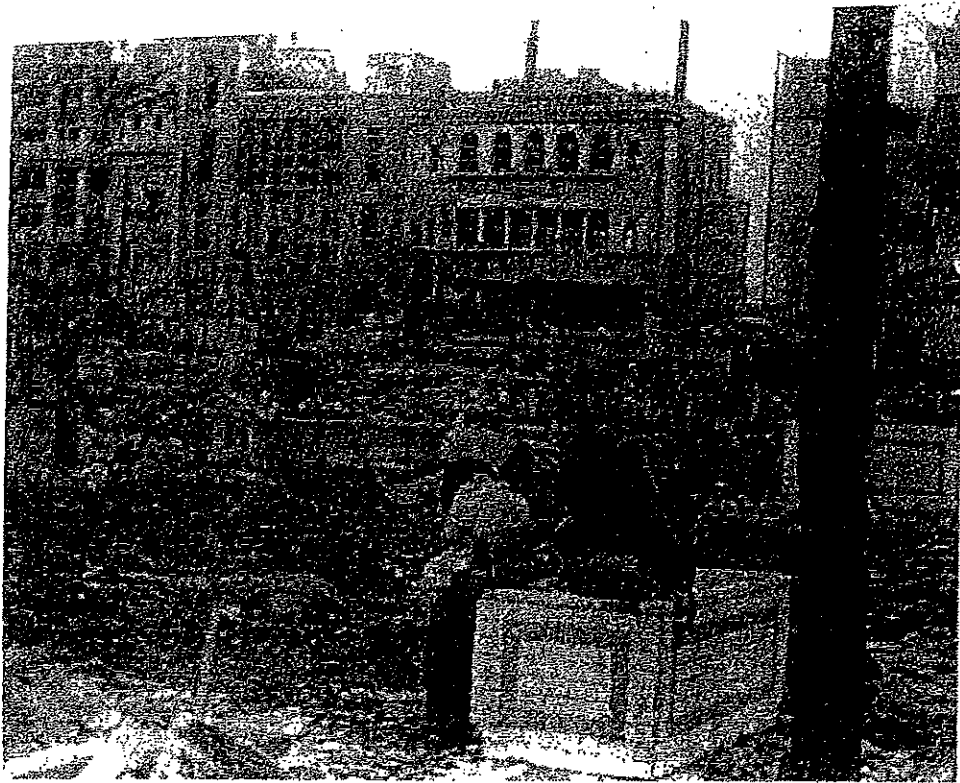
私は向島区(現在の墨田区向島)に住んでいました。当時私は国民学校高等科2年でした。戦争が激しくなり、やがて3月9日の大空襲に遭いました。

あの夜、サイレンの音が聞こえ、焼夷弾を雨あられのごとく落とされ、辺りは火の海となりました。隣組の人たちと一緒に入っていた防空壕も危うくなり、みんな火のない方に逃げ始めました。その時の火の勢いはすくなく、焼けた木の電

信柱や家が燃えた火の囲まりが体に落ちてくるのを払いながら、みんな夢中で逃げました。どのくらい歩いたか分かりませんが、気がつく私たちは大きな建物の中にいました。後で分かったことですが、その建物は消防署でした。

B29も飛び去り、やがて夜が明け、誰ももなく焼け跡に向かつて歩き出しました。また火がくすぶる中、そこは地獄でした。そこからは「死人の山」。それは口では言えないすごさで、その山を乗り越えなければ先に進めないのです。その方たちに手を合わせながら歩きました。

途中、とぶ川から息も絶え絶えに助けを求め、また家から逃げずに座ったまま蒸し焼きになっていた人、それは見るも無残な姿でした。あの日は、私が生きていく限り、目で焼き付き、忘れられることは出来ません。

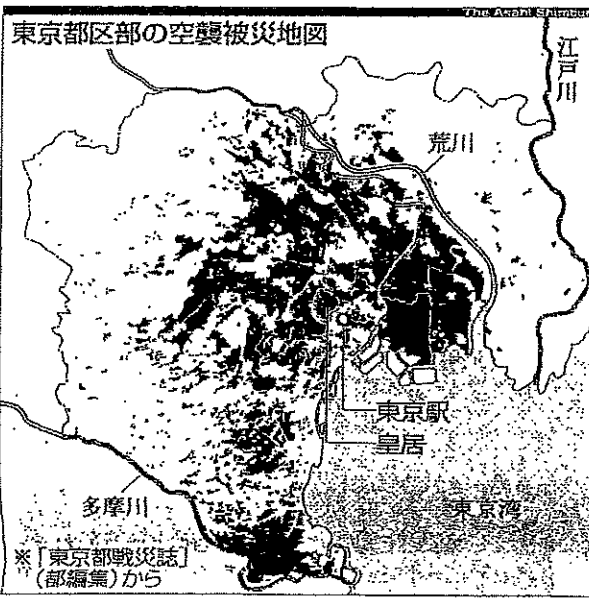


空襲で焦土となった東京・新宿駅前で終戦時、途方に暮れる母子

東京への主な空襲（昭和20年）

	3月10日	4月 13-14日	4月15日	5月24日	5月25日
来襲機	279機	328	109	520	464
投下爆弾	2個	460	99	130	149
投下焼夷弾	12,202個	15,548	11,452	36,889	30,203
死者	83,793人	2,459	841	762	3,242
傷者	40,918人	4,746	1,620	4,130	13,706
死傷者	124,711人	7,205	2,461	4,892	16,948
被災者	1,008,005人	640,932	213,277	224,601	559,683
被災家屋	268,358戸	171,370	50,874	64,487	156,430
被災地域 (現在区名)	江東、墨田、 中央、台東、 荒川など	豊島、文京、 荒川、北、新 宿、港、千代 田など	大田、港、目 黒、品川、世 田谷など	目黒、大田、 港、杉並、品 川、渋谷など	中野、千代 田、新宿、渋 谷、目黒など

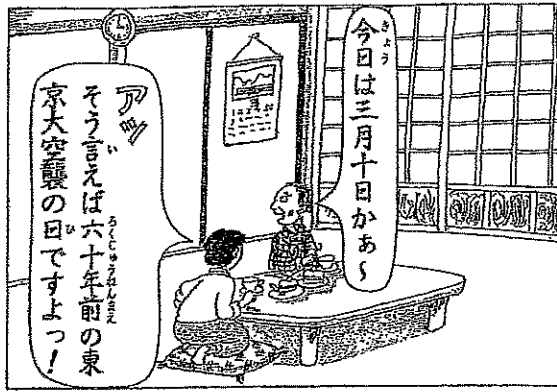
「東京空襲を記録する会」提供



第十一話

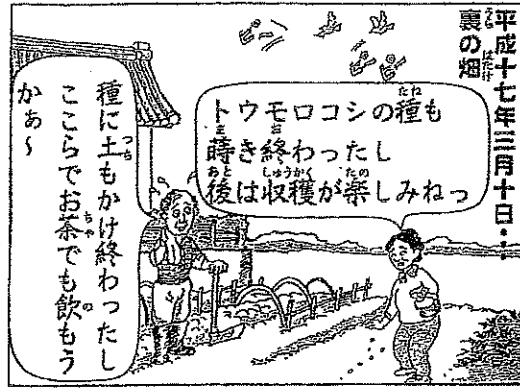
「東京大空襲をこの目で」

原作 高橋節子(小松地区)
昭和十一年(一九三六)年生
編集 堤 輝彦(教育委員会)
絵 大嶋清巳(小松地区)



今日は三月十日かあ

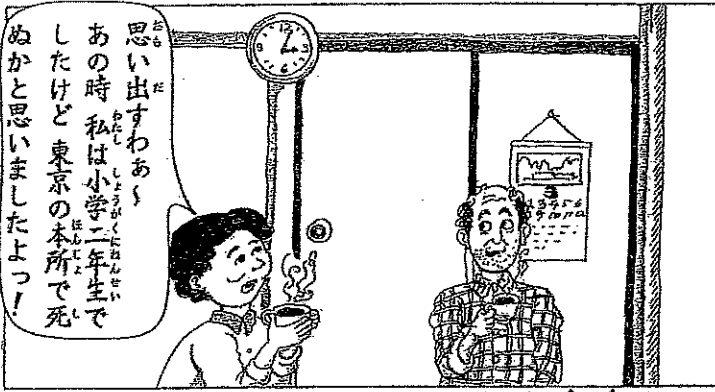
アッ
そう言えば六十年前の東京大空襲の日ですよっ!



平成十七年三月十日
裏の畑

種も
トウモロコシの種も
とき終わったし
後は収穫が楽しみねっ

種に土もかけ終わったし
ここらでお茶でも飲もう
かあ



思い出すわあ
あの時私は小学二年生で
したけど東京の本所で死
ぬかと思いましたよっ!



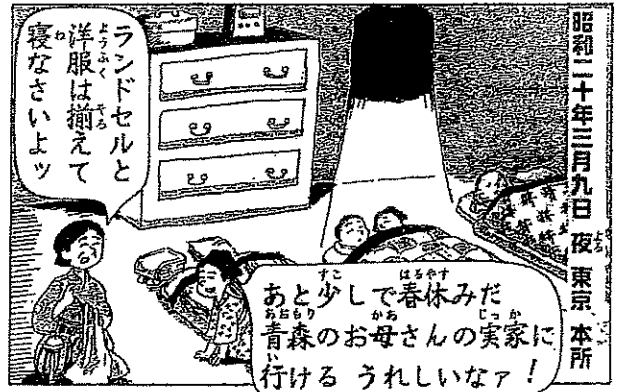
あの時俺は神崎小の五年生だっ
たけど夜中に東京の空が真っ赤
だったのを覚えているよっ



空襲警報発令 同夜十時三十分頃

節子ッ!
赤ちゃん
負ってッ!!

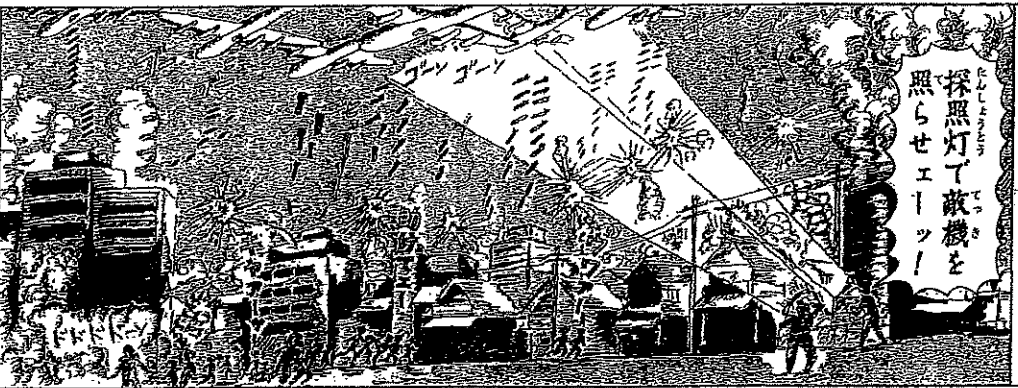
ハイッ



昭和二十年三月九日夜東京本所

ランドセルと
洋服は揃えて
寝なさいよッ

少しで春休みだ
あと青森のお母さんの家に行ける
うれしいなア!



三月十日 午前0時八分 B
29爆撃機は東京下町(本所
・深川・浅草方面)に侵入
焼夷弾での「低空無差別爆
撃」を約二時間半にわた
り、死者約十万人、負傷
者約四十万人、その他甚大な
被害をもたらした。

※探照灯・・・サーチライト(反射鏡で遠距離を照射する装置)



アッ お母さんの
背中が燃えてるッ

もう少しだから
頑張らなさいッ!
熱い!



防空壕の中

みんなッ
頑張るのよッ!

熱いよオ～

このままでは全員蒸
焼きになってしまう
それぞれ別の場所に
逃げろッ!!

ハイッ!



こっちだッ
早く入れエーッ!!

熱いよオ

みんなッ
防空壕よッ!

この漫画は、平成七年十月に発行された
「生命と平和の尊さを―私の戦時体験から―」
(三十話)を編集・発行するものです。



アツ 節子ッ
あの焼け跡へ
行こう!

三時間近く逃げ惑い やつと深川地区の焼け跡に逃げ込んだ



ほんとによかったア〜

微用で出勤していた父が私達をやつと捜し当て 一晩中トタン板で火の粉を払ってくれた

アツ お父さんだッ!



火の粉は俺が払ってやるッ!!

アツ 栄ちゃんが泣かないッ!
栄ちゃん 栄ちゃんッ!!

※微用... 国から強制的に仕事に従事させられること



墨田区本所の惨状



台東区浅草の惨状

※右の建物は浅草松屋



早く救護所へ行きましょッ

栄ちゃん...

お腹がすいたよウ〜

この時 生後一ヶ月の栄子ちゃんは極度の熱風と疲労の為 既に亡くなっていた。そして栄子ちゃんの亡骸は翌日 本所町内会の方にお預りして倉庫にしまして貰い、後日遺骨を取りに行き、今は神崎に眠っている。



救護所にて治療と乾パンの支給を受ける

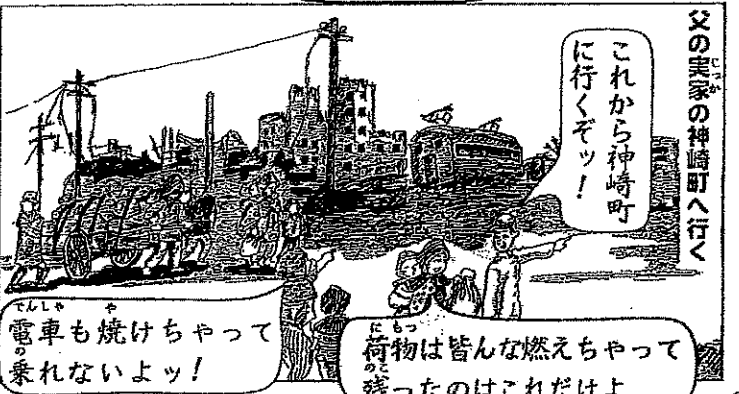
しかし 栄子にはかわいそうなことをしたなア〜

やつと見えるようになった



アツ あつちで何か食べてるウ

栄ちゃん 天国に行ってるかなア〜



父の実家の神崎町へ行く

これから神崎町に行くぞッ!

電車も焼けちゃって乗れないよッ!

荷物は皆んな燃えちゃって残ったのはこれだけよ



やつと食べ物にありつけたなア

ありがたいねエ〜

これっぽっちしか無いのオ



随分大変だったんだなあ

私もよく生き延びたと思うわ戦争は絶対にはいけませんね



そうかあ〜

あれから軍のトラックで市川まで乗せて貰って電車や汽車でやつと神崎へ着いたのよう

平成十七年三月十日

この漫画は、当時戦争を体験された方々の貴重な記録を後世に伝えるために作成したものです。

発行 神崎町教育委員会